■コメント

歴史地理学　58－1（278）73-74　2016. 1

須山聡・湯澤規子報告によせて

野　間　晴　雄

第２セッション「市場と生活」の２報告は，地域資源がいかに活性化のプロセスをたどるか，その結果としての変化を地域社会の文脈で考察している。いずれも近現代を扱い，現在からのまなざしが明瞭に論考に表れている。

市場は「いちば」とも「しじょう」とも訓める。前者は定期的に商人が売買を行う場所（場）であり，生活のにおいがする公設市場，六斎市，朝市など伝統的で相対的に小規模なものをさす。いっぽう後者には，この意味に加えて，商品の売買や交換が行われる抽象的な場や販路という広義の意味に解する場合が多く，より経済指向的である。

資源という言葉は近代「資源論」に代表されるように，生産とその獲得や開発に肩入れした用い方がされてきた。それに対して，ポストモダンに突入した21世紀には，再び生活の側面が強調され，非市場な性格や象徴性が付与される傾向が復活してきた。資源の対象は文化や自然，知識にまでおよび，意識的に操作される目的をもつ存在でもある。資源には生産もあれば利用・消費の側面もある。文化人類学では「資源人類学」[1] のような論集まで編まれているが，ここでいう資源とは地域資源とほぼ同義である。

須山報告は奄美大島の観光資源がいかに商品化されるかを，鶏飯という奄美独自の郷土料理と，2010年以降の夏冬に奄美群島観光物産協会が実施する「あまみシマ博覧会」のイベントを対照比較して考察する。島の外部と内部の双方に配慮した複眼的分析に特色がある。ただ，ここでいう観光は，マスツーリズムの対蹠にあるもうひとつのツーリズム，オルターナティブツーリズムである。沖縄がマスツーリズムを経験してからオルターナティブツーリズムにシフトしてきたのに対して，奄美はいまだかつてマスツーリズムを経験したことがない。沖縄返還までは日本の最西端であった奄美群島の与論島は，都会の文化が持ち込まれ南島離島ブームのひとつの極致であった。

そのころ奄美大島は大島紬が全盛であり，本土から多くの買い付け商人で賑わう名瀬の飲食街では簡便な鶏飯が酒のシメとなったが，観光とは無縁であった。鶏飯は江戸時代末に存在が確認でき，薩摩への接待饗応料理として考案されたという言説が奄美では流布している。しかしそれが強化されたのは，1968年に皇太子夫妻の奄美訪問で試食・絶賛されたという「神話」以降であるという。須山は観光学では常套化しているゲスト・ホスト論や言説分析の手法に加えて，鶏飯店の来歴と分布をゼミ学生と協働して悉皆調査して分布図を作成したところに大きな意義がある。鶏飯がファストフードとして，低価格化とバリエーション拡大によって，地元の人の料理ともなっていく過程を論じる[2]。

後半では，「あまみシマ博」のアトラクション資源を観光パンフレット等から商品化の程度を考慮して抽出し，分布図にして考察する。「あまみシマ博」には大島紬の泥染体験のような外部からも一定の観光客を集めているイベントがある一方で，「道の島の古道を歩こう」や，Ｉターン者が実施するフェルト手

芸やスイーツ作りのように観光資源化はされたが，観光商品化にはほど遠いイベントである。前者は複雑な工程のハイライトの一部を切り取って商品化した。後者は地域住民の新たなスキル習得や知識獲得・教育的効果が中心となる。その関係を須山はオーセンティシティ（真正性）とアトラクション化のトレードオフ（二律背反関係）としてとらえ，それを段階論に結びつける。これは観光やマーケティング（広義の市場）という文脈から肯定されうる。しかし内発的地域おこしの到達という論点からは，その並立こそが重要である。

湯澤は地域資源を活かす地域づくり実践の近代以降の系譜に着目する。対象地域は山梨県甲州市，旧勝山町である。もともと山の傾斜地が多い土地柄で，甲州街道沿いの交通条件を利用した近世以来ブドウが特産で，養蚕が副業として行われてきた畑方農村である。幕末以降の海外での生糸需要による養蚕・製糸業の隆盛，葡萄酒という新たな醸造商品の確立によってさらに外部との接触が増加し，市場・市況に敏感な商業的性格の強い農村として位置づけられる。

地域の有力者・名望家は，経営感覚をもった技術の普及者でもあった[3)]。町内でのフィールドの設定は重層的である。菱山集落の明治37（1904）年に始められた敬老会から戦後の４Hクラブ，青年会，さらには甚六会の植樹運動，その後継組織への変遷の地域づくり系譜をたどりながら，湯澤は主体自体が農家の後継者や担い手から，この地域への流入者・帰還者も含む混淆的性格に変化していることを指摘する。

平成の合併を経ても，勝沼の名前を残すために住民の発案で月１回の朝市「かつぬま朝市」が企画され，その好評判から多くの地域外からの購買者・サポーターが増加し，創設者の予想を超えた展開がみられた。朝市の名称は平成の合併による甲州市よりは狭い範囲の地名を冠しているが，そこにかかわる人々の範囲は甲州市を超えて広がる。報告者はその自生的性格の背景に，無尽講的組織が連綿と継続してきたことを指摘する。さらに，明治行政村である旧勝沼町祝村における先進・開明性に言及するなど，長期的歴史過程を重視する。

近年の観光学的アプローチでは，目前のまちづくりの制度・経営分析に終始して，その主体の系譜にまでは関心がいかない。ユニークな場所性を重視し，それを史料と住民のダイアローグを結合して考察する点は，近代歴史地理学の新しい記述スタイルへの挑戦でもある。このような柔軟かつ重層的な地域づくりを可能にした人材に重きを置く姿勢は，現代の匿名社会では貴重である。

その一方で，市場に敏感な風土とともに，ネット社会での情報の拡散によって，より異質な組織を縦横に渡りあえる新しい人材層が誕生してきた現在的状況にいかにアプローチするかの戦略も必要である。住民の拠り所づくりは何もシニア層だけに限らない。地域の子ども，ジェンダー的視点，地域外に働きに出ている元住民も巻き込んだオープンシステムに対して，歴史地理学からいかなる説明が可能なのか，さらにはその知見を地元にいかに還元するかの応用的課題も垣間見えてきた。

（関西大学）

〔注〕

1）2007年に刊行された全９巻の論集（昭和堂）には，「資源と人間」，「資源化する文化」，「資源とコモンズ」，「知識資源の陰と陽」，「躍動する小生産物」，「貨幣と資源」，「自然の資源化」，「生態資源と象徴化」，「身体資源の共有」のタイトルが付されている。

2）須山聡編著『奄美大島の地域性－大学生が見た島/シマの姿―』海青社，2014。

3）湯澤規子「山梨県社八代郡祝村における葡萄酒会社の設立と展開―明治前期の産業の担い手に関する一考察―」，歴史地理学第265号（第55巻第３号），2013，1-22頁。